

7 山形大学小白川キャンパス周辺における小学生保護者の不安経験と大学生の問題認識

大 杉 尚 之

1. はじめに

山形大学小白川キャンパス（山形市小白川町1-4-12）は、大学の敷地と住宅街が近接しており、地域住民と大学生の生活空間が重複している。このような状況では住民は大学生の交通安全に関する意識や振る舞いに懸念を抱きやすい。双方の関係悪化を未然に防ぎ、住民の安心感を高めるための方策を検討する必要がある。

福野・渡邊・山田（2013）では、キャンパス周辺に位置する小学校の保護者を対象とし、山形大学の大学生（山大学生）に対する懸念の実態を把握する調査を行った。具体的には、山形大学の学生に対して、どのような危険や不安を感じた経験があるか（不安経験）、または山大学生との間で将来トラブルを経験するのではないかという住民の懸念（葛藤懸念）がどのような心理的要因に起因しているかを検討した。その結果、不安経験としては自転車の危険運転をあげる人が多くおり、子どもが事故に巻き込まれることを不安視していた。また、不安経験を多く経験している人ほど葛藤懸念を高く感じており、さらに大学への好感度や山大学生の規範意識が低い人ほど、葛藤懸念が高まる傾向であった。以上の結果より、地域住民の懸念を下げるためには山大学生の問題行動に対処すること、大学の好感度を高めること、山大学生の規範意識に対する保護者の認知を肯定的にすることが重要であることが明らかとなった。

本研究は、福野・渡邊・山田（2013）の調査結果との時点間比較を行い、山形大学の学生に対する不安経験が前回の調査からどのように変化しているかを検討することを第一の目的とした。特に、前回の調査では自由記述によって得られた不安経験として、自転車の危険運転に関する回答が多く報告された。そこで本研究では、これらの回答を選択肢として設け、山大学生の行動に対する不安経験が改善されたかについて検討を行なった。

また、本研究では、地域住民が感じる不安経験を山大学生が予想できるかについて検討することを第二の目的とした。前回の調査では、地域住民が山大学生に対して抱く不安経験について検討項目にしたが、山大学生自身が問題行動として認識できているかについては検討されていない。認知心理学の分野において、自分の能力、達成度、行動等に関する無知を認識できていない状況として「メタ無知（Dunning, 2011）」が知られている。メタ無知状況では自分自身の行動を楽観的に評価する傾向があることが知られている（Dunning = Kruger 効果, e. g., Dunning, 2011）ことから、山大学生は地域住民の不安経験をより少なく見積もっている可能性が考えられる。そ

こで、山大学生を対象とした調査にも、地域住民を対象とした調査と同じ質問項目を設け、回答を予想して答えるように求めた。

尚、分析データとしては2018年12月に山形大学周辺の小学校（山形市立第五小学校）の子供の保護者（以下、地域住民）および2019年1月に山形大学の大学生（以下、山大学生）に行なったアンケート調査データを用いた。質問項目として地域住民には、大学への印象、山大学生への印象、不安経験、山大学生と将来トラブルを経験するのではないかとという懸念などに回答を求めた。山大学生には、上記の質問項目について地域住民の回答の予想に加え、山大学生自身の大学への印象についても回答を求めた。

2. 山形大学小白川キャンパスへの印象

まず、地域における大学の必要性の観点について実態を把握するために、地域住民へは山形大学小白川キャンパスの印象について尋ねた(Fig. 1)。また、山大学生には「地域住民が小白川キャンパスに抱いている印象」を予想して回答することを求めた (Fig. 2)。地域住民の回答は、いずれの項目でも7割近くの人が存在意義を認めているようであった（「よく思う」と「ときどき思う」の合計）。この傾向は前回の調査と一致していた。一方、山大学生の予想はいずれも5割程度であり（「よく思うだろう」と「ときどき思うだろう」の合計）、地域住民からの期待を過小評価している傾向が示された。

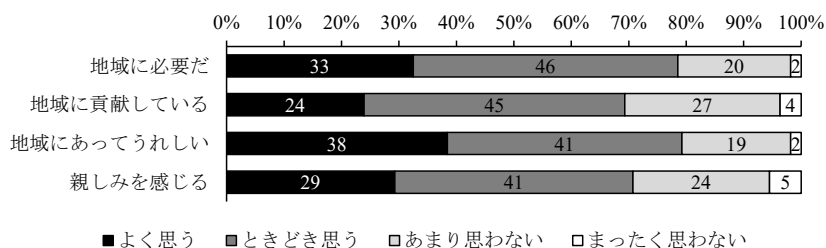


Fig.1. 地域住民が抱く山形大学小白川キャンパスの印象（地域住民）（上2つ：N=163，下2つ：N=164）

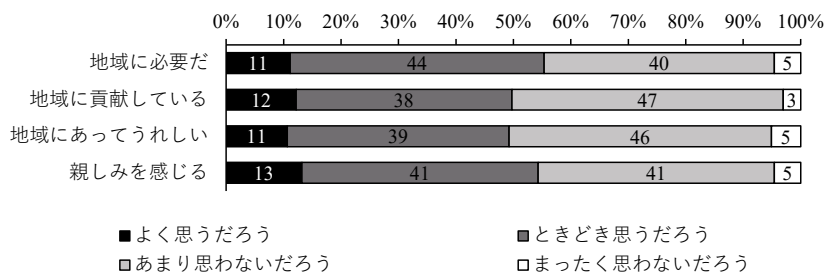


Fig.2. 地域住民が抱く山形大学小白川キャンパスの印象の予想（山大学生）（各項目 N=197）

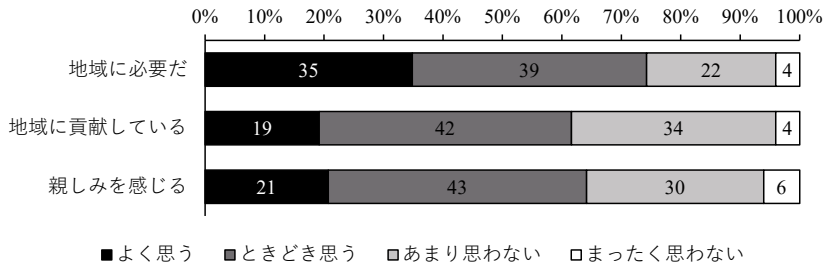


Fig.3. 山形大学の学生が抱く山形大学小白川キャンパスの印象 (山大学生) (各項目 N=198)

また、山大学生自身が山形大学小白川キャンパスにどのような印象を抱いているか尋ねたところ (Fig. 3), 「地域に必要な」は7割以上, 「地域に貢献している」と「親しを感じる」は6割程度にのぼるなど (「よく思う」と「ときどき思う」の合計), 山大学生自身も地域への存在意義を感じている傾向が示された。

3. 山形大学の学生の印象

地域住民へは、山大学生に抱いている印象 (Fig. 4), 山大学生には地域住民が抱いている印象の予想 (Fig. 5) の回答を求めた。その結果、住民の4割以上が山大学生の規範意識の低下を

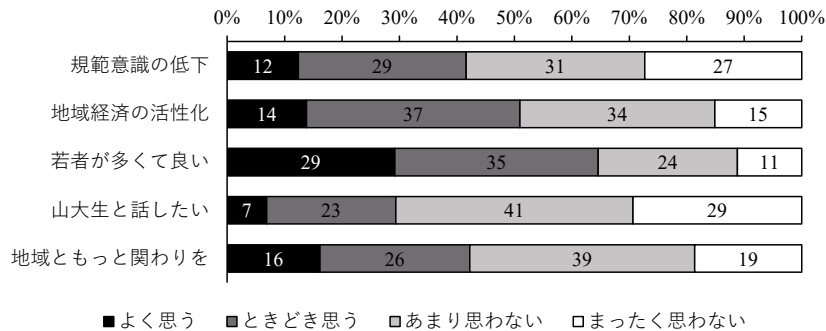


Fig.4. 地域住民が抱く山形大学学生の印象 (地域住民) (上から, N=161, N=159, N=161, N=160, N=161)

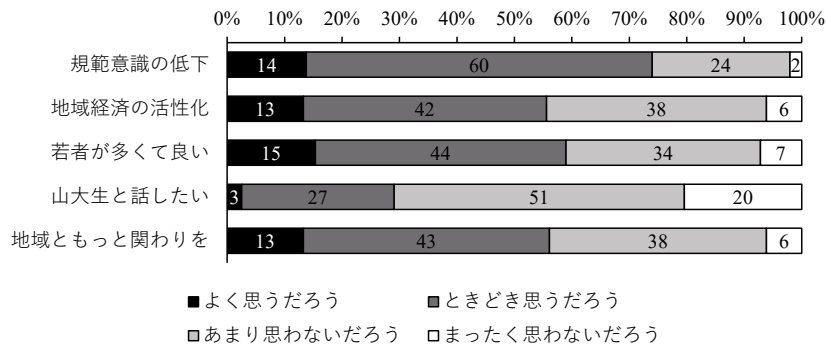


Fig.5. 地域住民が抱く山形大学学生の印象の予想 (山大学生) (若者が多くて良い: N=195, その他: N=196)

ときどきは感じているようであった（「よく思う」と「ときどき思う」の合計）。また、若者が地域に多く住んでいることも肯定的に評価されていた（上記と同様）。以上の傾向は前回の調査とも一致していた。一方、山大学生の予想では規範意識の低下が7割を超えており（「よく思うだろう」と「ときどき思うだろう」の合計）、より否定的に予想していることが示された。

4. 山形大学の学生に対する不安経験とその内容、不安経験時の対処

地域住民に、山大学生の振る舞いに対して危険や不安を感じた経験についてたずねた（Fig. 6）。また、山大学生には地域住民が抱えている不安経験を予想して回答を求めた（Fig. 7）。前回の調査（2013年）における五小保護者の回答では、不安経験は「よくある」が23%、「ときどきある」が23%、「たまにある」が30%、「まったくない」が23%であった。今回の調査結果も前回の調査とほぼ同じ割合であったが、「よくある」が6%程減少していた（「よくある」が17%、「ときどきある」が27%、「たまにある」が30%、「まったくない」が27%）。山大学生の予想では「よくある」が26%、「ときどきある」が47%、「たまにある」が25%と回答しており、不安体験を多く見積もっていること（特に「ときどきある」）が示された。

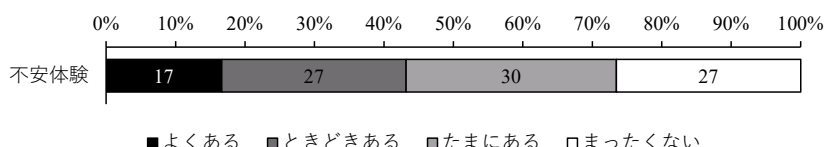


Fig.6. 山形大学学生の振る舞いに対する不安経験（地域住民）（N=162）

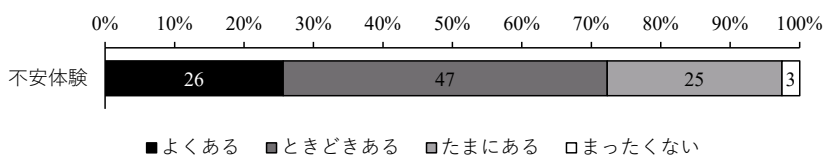


Fig.7. 山形大学学生の振る舞いに対する不安経験の予想（山大学生）（N=195）

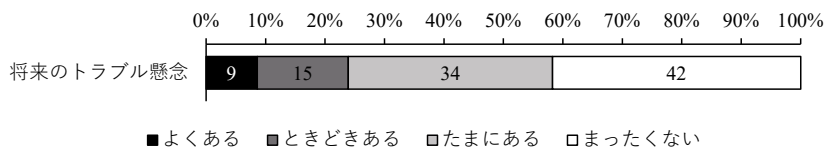


Fig.8. 山形大学学生の振る舞いに対するトラブル懸念（地域住民）（N=163）

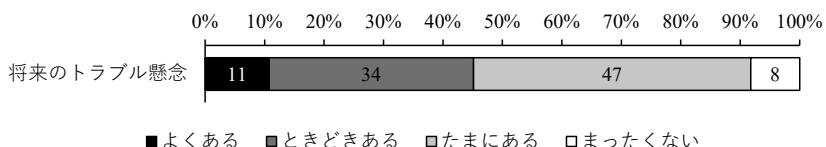


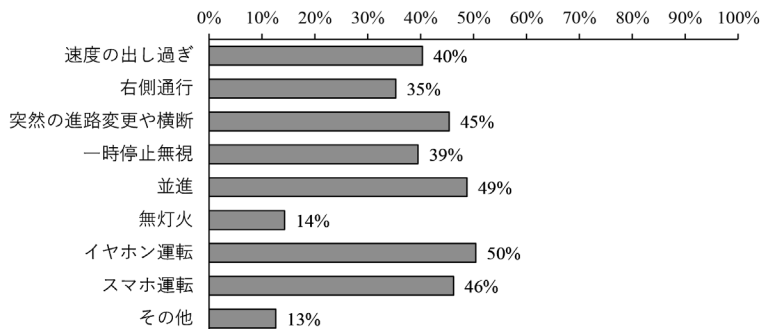
Fig.9. 山形大学学生の振る舞いに対するトラブル懸念の予想（山大学生）（N=195）

地域住民に、山大学生の振る舞いに対する将来のトラブル懸念についてたずねた(Fig. 8)。また、山大学生には地域住民が抱えているトラブル懸念を予想して回答を求めた (Fig. 9)。前回の調査 (2013年) では、「よくある」が8%、「ときどきある」が18%、「たまにある」が42%、「まったくない」が32%であった。前回の調査よりもトラブル懸念を「まったくない」と答えている割合が増加している傾向が示された (「よくある」が9%、「ときどきある」が15%、「たまにある」が34%、「まったくない」が42%)。また、山大学生の予想では「よくある」が11%、「ときどきある」が34%、「たまにある」が47%であり、将来のトラブル懸念 (特に「ときどきある」と「たまにある」) を多く見積もっていることが示された。

5. 具体的な不安経験の内容について

前回の調査では、自由記述によって報告された不安経験の具体的内容について集計を行なった。

A 地域住民



B 大学生の予想

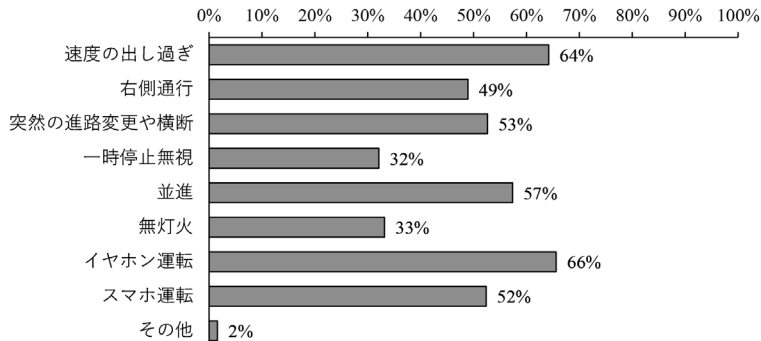


Fig.10. 不安経験の内容および不安経験の予想 (複数回答あり), 地域住民 (N=119), 大学生 (イヤホン運転とスマホ運転: N=189, その他: N=190)

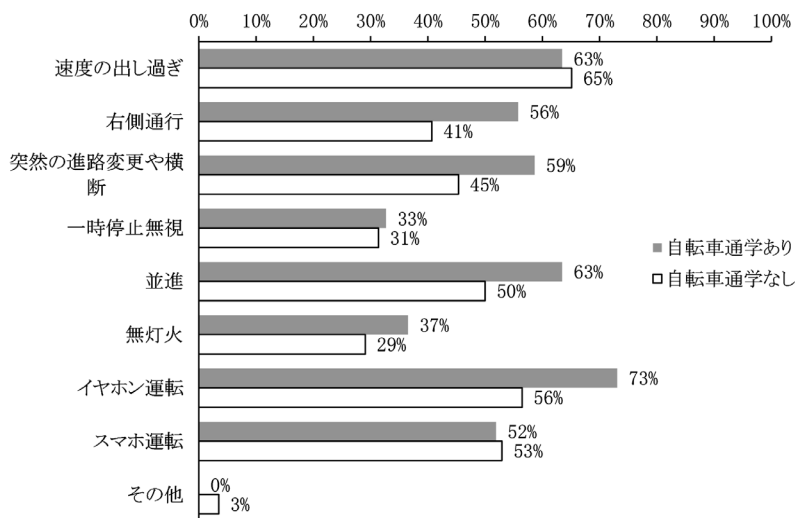
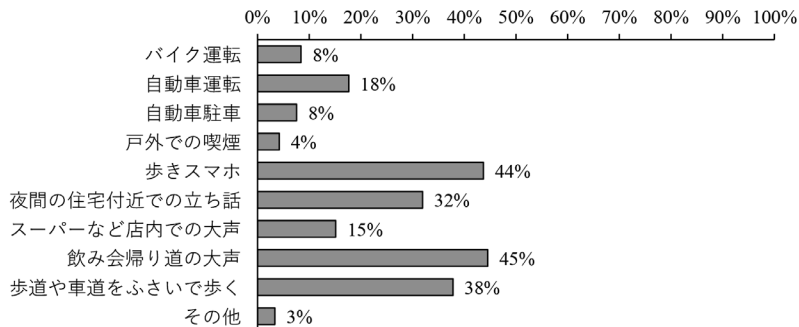


Fig.11. 自転車通学ありの大学生と自転車通学なしの大学生による不安経験の内容および不安経験の予想（複数回答あり），自転車通学あり（N=104），自転車通学なし（イヤホン運転とスマホ運転：N=85，その他：N=86）

その結果，自転車の危険運転に関するものが最も多く，騒音や道路の歩き方などが続いた。本調査では，あらかじめ選択肢として設け，地域住民と山大学生（Fig. 10）に回答を求めた。まず，前回の調査で多かった自転車の運転に関するものを個別の質問項目としてたずねた。無灯火以外の項目では3割から5割が危険や不安を感じた項目として回答しており，自転車の運転に関する問題は改善していない傾向が示された。山大学生の予想では全体的に割合が多くなっており，学生内でも自転車の運転が問題であることは自覚されていると考えられる。また，追加分析として大学生を自転車通学ありの学生と自転車通学なしの学生に分け（Fig. 11），当事者と非当事者で回答の傾向に違いがあるかを調べた結果，自転車通学ありの学生の方がより高い割合で問題であると回答していることが示された。

次に，自転車以外の質問項目についてもたずねた。地域住民と山大学生（Fig. 12）に回答を求めた。前回の調査では騒音の問題と歩道や車道を歩くマナーの問題が指摘されていたが，今回の調査でも同様の項目の回答が多くなっていた。飲み会の帰り道の大声や夜間の住宅付近の立ち話は，前回の調査でも問題が指摘されていた項目であった。また，歩道や車道をふさいで歩く，歩きスマホなど歩行者のマナーの問題も前回から指摘されている問題であり，慢性化している可能性がある。全体的に，山大学生の予測の割合が高く，問題であることは自覚されていると考えられる。

A 地域住民



B 大学生の予想

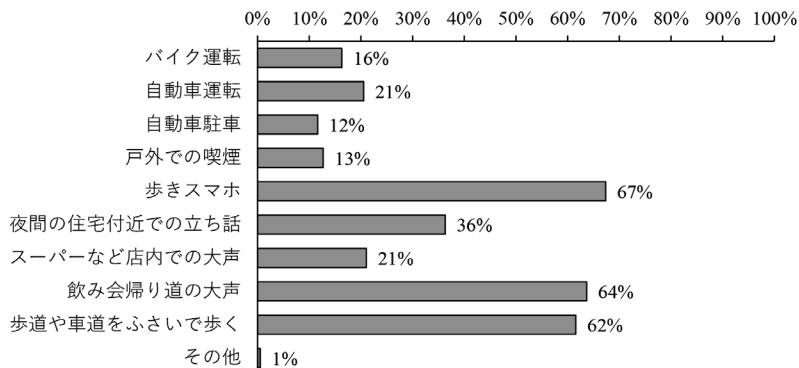


Fig.12. 不安経験の内容および不安経験の予想 (複数回答あり), 地域住民 (N=119), 大学生 (自動車駐車と戸外での喫煙: N=189, その他: N=190)

6. 考 察

6.1. 前回の調査との時点間比較

本研究の第一の目的は、福野・渡邊・山田 (2013) の調査結果との時点間比較を行い、山形大学の学生に対する不安経験が前回の調査からどのように変化しているかを検討することであった。まず、山形大学小白川キャンパスと山大学生の印象は前回の調査から変化はしていなかった。多くの地域住民が小白川キャンパスを必要と思い、地域にあってうれしいと感じているようであった。また山大学生のような若者が地域に住んでいることを肯定的に感じ、より地域と関わって欲しいという期待があることも示された。このようなポジティブな側面がある一方で、山大学生に対して感じる規範意識の低下や葛藤懸念は前回の調査から改善されておらず、印象改善に努める必要がある。特に、地域住民の約4割が不安経験として回答している「自転車の運転」、「騒音」、「歩

行時のマナー」に関する問題は、前回の調査でも同様の傾向が示されていることから、慢性化している問題であり、対応が必要である。特に自転車の運転に関しては、大学への登校と小学生の登校が重なり、不安が生じやすい可能性がある。そのため「速度の出し過ぎ」や「突然の進路変更や横断」など、事故につながりやすい行動を不安視する回答が多くなったと考えられる。また、「並進」、「イヤホン運転」、「スマホ運転」等、道路交通法上でも問題となる行動についての回答も多く、山大学生が基本的な運転ルールを理解出来ていないことに由来している可能性も高い。

以上のように、本研究の結果は前回の調査とほぼ同じ傾向が示された。山形大学や山大学生に対して肯定的な評価がある一方で、規範意識の低下、不安経験等に関しては改善が見られなかった。特に、自転車の危険運転に関する不安が多く回答されたことについては対策を考えていく必要がある。

6.2. 山大学生の問題認識

本研究では、地域住民が感じる不安経験を山大学生が予想できるかについて検討することを第二の目的とした。自分の能力、達成度、行動等に関する無知を認識できておらず、自分自身の行動を楽観的に評価する傾向があることが知られている (Dunning = Kruger 効果, e. g., Dunning, 2011)。そこで、山大学生は地域住民の不安経験をより少なく見積もっていると予測をして検討を行った結果、予測とは逆に多く見積もっていることが示された。具体的には、全体的な傾向として、地域住民に比べて山大学生の予測の方がネガティブな方向に評価されている傾向が示された。このことから Dunning = Kruger 効果は生起していないと考えられる。このように山大学生が自らの行動に対する評価を悲観的に予測している背景としては、これまでに自分自身が行なった行動や、見た行動の中に迷惑行為に該当するものがあり、山大学生自身も問題を自覚している可能性が考えられる。例えば、自転車通学ありの山大学生の方が自転車通学なしの山大学生よりも「並進」、「イヤホン運転」を不安経験の回答として高く見積もっていた。このことから、自分自身や友人が行なった行動として思い当たるふしがあるのかもしれない。すなわち、山大学生自身が問題行動を自覚しているものの、行動は変えられていないのかもしれない。

山大学生が問題行動を自覚しているものの、行動を変えられていない理由として、交通場面における社会的規範、具体的には命令的規範と記述的規範の影響が考えられる (Cialdini, Kallgren & Reno, 1991)。命令的規範は、多くの人々によって適切・不適切が一義的に知覚され、社会的報酬や罰をもって行動が志向されるものであるが、交通場面では法律が該当する。一方、記述的規範は、多くの人々が実際にとる行動によって示されるものであり、周囲の他者の行動が該当する。命令的規範よりも記述的規範が優勢になる状況 (例えば、周囲の他者が赤信号を渡っている) では、法律や交通ルールが無視される傾向にある (北折・吉田, 2000; 佐藤・大杉, 2017)。山大学生が周囲の他者の行動を基準に行動を決定したことで、問題行動が記述的規範として定着してしまっている可能性がある。山大学生が命令的規範に従い行動を決定するためにも、基本的な

交通ルールを学習する機会が必要であると考えられる。

6. 3. 今後の取り組みに向けて

本研究では、山形大学の山大学生に対する不安経験として、地域住民の約4割が「自転車の運転」、「騒音」、「歩行時のマナー」を挙げており、2013年度の調査から慢性化していること、山大学生自身も問題は認識しているものの、行動変容には至っていないことを明らかにした。中でも、特に自転車の危険運転の問題は早急に対策が必要である。山形県は令和元年12月に「山形県自転車の安全で適正な利用の促進に関する条例」を制定し施行した。この条例では、交通ルールの順守、自転車の安全利用、自転車保険の加入義務化、自転車交通安全教育の充実、自転車の適正な管理などが定められている。条例では、「大学、高等専門学校、専修学校等の長は、学生、生徒に対し、自転車の安全で適正な利用を行うように努める。」となっており、大学では自転車の危険運転を減らすための教育を行うことが必要とされている。山形大学では、前回の調査後に自転車の危険運転に関する不安の声を大学内で共有し、山大学生に対する安全教育を行なった。具体的には平成26年度の「スタートアップセミナー」において自転車の危険運転などを考えさせるワークショップが導入された。しかし、これらの試みは、全学および学部内においても現在まで継続されていない。これらの試みを、改めてカリキュラムに組み込み、山大学生の自転車交通安全教育を定着させる必要があるだろう。

また、自転車の危険運転については、山形大学小白川キャンパスの地理的な特徴も含めて検討する必要があるのかもしれない。山形大学小白川キャンパスは周囲に速度が出やすい坂道も多くあり、道幅も比較的狭い箇所が多く、地理的にも危険度が高いことが指摘されている（福野・渡邊・山田, 2013）。キャンパス周辺に複数の小学校もあり、通学路を共有している場所も多い。小白川キャンパスがこのような地域にある以上、山大学生の自転車通学にはリスクが伴っている。このリスクを大学としてどのように解消していくべきか、考えていく必要があるだろう。

引用文献

- Cialdini, R.B., Kallgren, C.A., & Reno, R.R. (1991). A focus theory of normative conduct : A theoretical refinement and reevaluation of the role of norms in human behavior. *Advances in experimental social psychology*, 24, 201-234
- Dunning, D. (2011). The Dunning – Kruger effects : On being ignorant of one's own ignorance. *Advances in Experimental Social Psychology*, 44, 247-296
- 福野光輝・渡邊洋一・山田浩久 (2015). 山形大学小白川キャンパス周辺における小学生保護者の不安経験と葛藤懸念, 山形大学大学院社会文化システム研究科紀要, 12, 73-84.
- 北折充隆・吉田俊和 (2000). 記述的規範が歩行者の信号無視行動に及ぼす影響 社会心理学研究,

16, 73-82.

佐藤祐也, & 大杉尚之. (2017). 記述的規範と人数が歩行者の信号無視に及ぼす影響. 山形大学大学院社会文化システム研究科紀要, 14, 55-64.

Troubling Experiences of Parents of Elementary School Students Living Near the Yamagata University, and Problem Recognition Among University Students.

Takayuki OSUGI

The present study investigated the troubling experiences of the parents of elementary school students living near Kojirakawa Campus of Yamagata University, and the problem recognition among the university students. Results of a questionnaire survey showed that parents reported troubling experiences with students, such as unsafe bicycling, disruptive noisemaking, and obstructive walking behavior. This result is consistent with that of a previous survey by Fukuno et al. (2015). Furthermore, the university students could correctly anticipate that the parents of elementary school students perceived their behavior as a potential risk. Yamagata University should, therefore, think of solutions for controlling their students' behavior to diminish parents' anxiety about interpersonal conflict.